

山崎 充哲 さん

命のリレーで 多摩川を未来へとつなぐ



山崎さんは、ライフジャケットを着ることを基本に、子どもたちが水辺を安全に楽しむための大切な約束を伝えながら、活動を続けている

「外来種は本来日本の川にはいてはいけないものです。でも、その命を粗末にしていわけではないわけではありません」
多摩川の生態系を守る活動に取り組みながら、山崎充哲さんは子どもたちに自然や命の大切さを伝えています。
無駄な命なんて一つもありはしない。そんな想いを込めた「命のリレー」が、今日も続けられています。

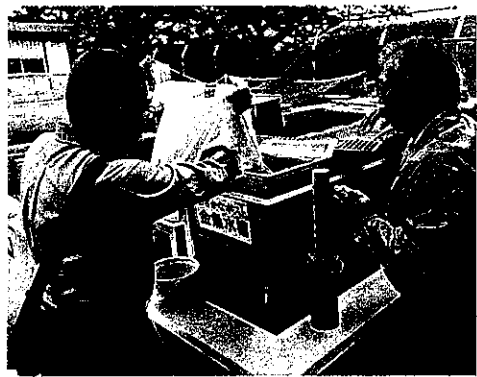
子どもの涙が
きつかけで生まれた
「おさかなポスト」

山梨県に水源を發し、下流域では東京都と神奈川県の間境となっている一級河川、多摩川。その川沿い、川崎市多摩区の稲田公園内にある生けすに、「おさかなポスト」という名前の水槽があります。「さまざま理由で、熱帯魚や金魚、カメなどを飼えなくなった人が、なんとか命を助けた」と持ち込み、ここで預かっています

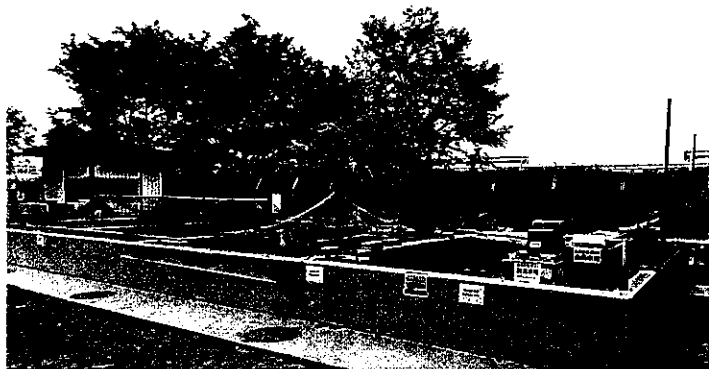
地元生まれ育ち、子どものころから多摩川を見続けてきた自然環境コンサルタント、山崎充哲さんが「おさかなポスト」を設置したのは2005年のこと。多摩川の調査で川沿いを歩いていたとき、金魚の入ったビニール袋を持って泣いている男の子に出会いました。聞けば、お母さんから川に捨てて来るように言われたと言います。「それなら、稲田公園の生けすで預かってあげるよ」。見かねた山崎さんが、自ら組合員である川崎河川漁業協同組合が管理する生けすに入れてあげる



「おさかなポスト」に預けられた魚やカメを見る山崎さんのまなざしは、常にあたたかい



「おさかなポスト」には、毎日のように多くの人が魚を預けに訪れる



清流に戻った多摩川で、生態系の保護に挑む

と、男の子は喜んで帰っていきました。

ところが、その子が友だちに話したのでしようか。それから1

カ月の間に300匹もの金魚や熱帯魚が生けずに集まったのです。「そうか、みんな困っていたんだ」。こうして、山崎さんは生けすに「おさかなポスト」と名前を付け、飼えなくなった魚を引き取る活動を始めました。

外来種が

越冬できるようになった

「タマゾン川」

「おさかなポスト」は、飼えなくなった魚やカメを引き取ることで、多摩川に外来種が放流されるのを防ぎ、生態系を守る重要な役割を果たしています。

昭和40年代に「死の川」とまで言われ汚染されていた多摩川は、

現在は春に数百万匹ものアユが遡上するきれいな川に戻りました。「これは、流域の皆さんの地道な努力と、経済的な負担によるものです」と山崎さんは話します。

流域の人々は水道料金に加え、それより高い場合の多い下水道料金を毎月負担し、下水処理場の整備を支えたのです。「自分の家が川とつながっていることを皆が意識したことで、多摩川は生き返ることができました」

かつて「死の川」とまで言われた多摩川には、現在、春に数百万匹のアユが遡上する



しかし、その一方で深刻になってきたのが、観賞魚などの放流による外来種の急増でした。しかも、下水処理場には家庭からお風呂や台所のお湯が集まる上に、汚れを除去する際にも水温が上がるため、その水が流れ込む多摩川の温度が上昇し、熱帯の外来種が越冬できるようになったのです。「タマ

川」ならぬ「タマゾン川」です。山崎さんが調べてみると、シルバニア、アロワナ、ピラニア、アリゲーター、ガーバイクなど、本来多摩川にい

つないだ命が、全国の学校で自然環境教育に活躍

るはずのない魚が次々に見つかりました。



事務所を兼ねる山崎さんの自宅でも預けられた魚を保護している

山崎さんは、外来種の放流を防ぐ活動のため、「おさかなポストの会」というNPO法人もつくりました。活動は次第に知られるようになり、設置から10年で持ち込まれた魚の数は優に10万匹を超えています。活動は、ボランティアや老人クラブの皆さんの協力も得ていますが、エサ代、電気代など毎月50万円ほどの費用は自らの負担です。

地道な努力により、稲田公園周辺の水域では外来種がかなり

少なくともりましたが、山崎さんは決して外来種の駆除をしているわけではありません。ポストに持ち込まれた魚は「預かった命」であり、新しい飼い主に引き取ってもらうことで「命のリレー」が続けられているのです。小学校だけでも全国約300校が協力し、ほかにも個人や学校、高齢者施設、児童養護施設、水族館などが魚を引き取り、命のリレーが行われています。

山崎さんは、子どもたちにな話をします。「飼っていた金魚が死んでもゴミとして捨てないでください。花壇の隅に埋めて花の種をまけば、埋めた金魚の栄養をもらって花が咲き、また新しい種ができて命のリレーができます」と。

出前授業などで小学校に行くとときも、必ず給食と一緒に食べ、話をします。「みんなのお椀に入っている豚肉は、豚さんが殺されて、多くの人の手を経てここに來ています。私たち人間はその命をいただいで生きているんです。もし給食を残したら豚さんの命がムダになってしまいます。大事に食べようね」。その日は給食がきれいになくなるそうです。

多摩川を 「良い子を育てる 良い場所」に



多摩川で釣りをする幼いころの山崎さん



「多摩川春のあゆ祭り」では、「大きくな〜れ」の掛け声とともに子どもたちが一斉にアユを放流

自然や生き物は
もちろん、子どもたちの
命を守るために

幼いころ両親に連れられて多摩川に遊びに行き、一人で行けるようになってからは、子どもも自分で20分かかかる坂道を毎日のように上り下りして通った山崎さん。「自然の素晴らしさ、命の大切さを教えてくれた多摩川は、いつまでもその自然や命の大切さを理解し、次の世代へ伝えていくことのできる良い子を育てる良い場所であってほしい」と想いを込めます。

このため、「おさかなポスト」の活動に加え、子どもたちを対象にした出前授業、移動水族館、流域のゴミ拾い、水辺の安全教室などにも力を入れています。また、多くの仲間や家族の協力を得て、稚アユを集めて放流する「多摩川春のあゆ祭り」や、ライフジャケット

「やまちゃん」と慕われる山崎さんの周りには、いつも子どもたちが集まってくる



「やまちゃん」と慕われる山崎さんの周りには、いつも子どもたちが集まってくる

トを着て多摩川を泳ぐ体験から、水の事故防止に役立てる「夏休み多摩川教室」を10年以上続けています。こうしたイベントでは、川での楽しい遊びとともに、川をきれいにするため家でできることや、外来種が生態系に与える影響も一緒に考えてもらっています。さらに、一人で川に行つてはいけないことや、もし川に落ちたらどうすればいいかなど、ユーモアを交えながら安全の基本を学んでもらいます。

今も、200種類以上の外来種が生息する多摩川。山崎さんは、「皆さんが、責任を持つて最後まで生き物を飼うことの意味や、自然を守るために何が必要かについて理解が深まっていけば、「おさかなポスト」もやがて要らなくなるでしょう。そんな日が来るまで、これからもこの大切な命のリレーを続けていきます」と熱く語ります。



移動水族館では実際に魚に触れて「命」を体感する

平成 29 年度 第一回家庭教育学級 報告書

6月24日(土)、山崎充哲氏を講師としてお招きし、本年度第一回家庭教育学級を開催いたしました。山崎充哲さんは1977年より淡水魚研究者として活動を始められ、現在は飼いきれなくなった魚を引き取る「おさかなポストの会」の代表として、多摩川の魚類研究をライフワークにされております。

当日は学校がお休みの土曜日でしたが、80名以上の保護者の方と児童がお集まりくださり、会場のランチルームがいっぱいになるほどでした。ご講演は「身近な多摩川からいのちを考えよう～タマゾン川ってなあに?～」をタイトルに、多摩川の水やそこ住む生態系について目からウロコのお話から安全な川の遊び方まで、ときにユーモアを交えつつお話いただき、1時間半があつという間でした。

ご講演の後にも山崎氏に質問するために沢山の児童が残っていましたが、一人ひとり気さくに丁寧に答えていただきました。

参加者からは「実はここまで熱中して聞くとは思っていませんでした。」「大人も子供も楽しめる内容でした。」など、肯定的なご意見を沢山いただいた一方で、「内容をもう少し先に知っていたら子どもを連れてこれたのですが・・・」というご意見もあり、事前の周知が十分ではなかったことが反省点となりました。この点、山崎氏は移動教室なども積極的に開催されているので、また機会があれば学校にお迎えしていただきたいと思われました。

ご参加くださった方、お忙しいところありがとうございました。

参加者からのご意見(一部抜粋)

身近な多摩川のことを全然分かっていなくて、今日のお話でたくさんを知りました。節水は心がけていましたが、これからの未来のためにもっと1人1人が気をつけないといけないなあと思いました。

身近な川なのに知らない事だらけでした。家でお風呂、お皿洗い、トイレ、意識しようと思います。

反省点

- ・初回の募集では参加者が少なかったので、再度、メールでの募集連絡と学校公開の際に名簿の横にチラシを置かせていただけたのが参加者の増加につながった。
- ・運動会の直前にチラシを配付したので、児童が運動会の準備に紛れて持ってこなかったり、自宅に持ち帰るのが遅くなることがあった。結果、1週間の締切では回答のスケジュールがタイトだった。提出の締切は2週間あってもよかった。
- ・締切から当日の開催までは2週間あれば準備は可能。
- ・当日の児童の参加者が予想外に増え、アンケートが足りなくなった。当日参加OKにする場合、アンケートの予備は20枚程度多くてもよい。
- ・アンケートの回収が参加人数に比べて少なかった。その場で書いてもらうのではなく、後日提出という形で配付する方がよかったかもしれない。
- ・ランチルームの空調調整が難しかった。
- ・各班3~4名のお手伝いを募ったおかげで設営撤収をスムーズに行うことができた。